

かねてよりおもひしこぞふし柴のこるばかりなる歎せんとは、といふ歌を、年比よみても
ちたりけるを、おなじくはさりぬべき人にいひもつびて、忘られたらんに讀たらば、集なごに入
たらんも、いうなるべしと思ひて、いかゞありけん、花園の左のおとゞ有仁○源に申そめてけり、其後
おもひのごとくやありけむ、此うたをまいらせたりければ、大臣殿もいみじくあはれにおぼし
けり、かひぐしく千載集に入にけり、世の人ふし柴の加賀とぞいひける、

〔本朝世紀〕康和元年九月九日戊申、此日參議正三位行備前權守藤原朝臣長房薨略○冲寛治六年九
月七日、兼太宰大貳、在任之間、嘉保元年、彦山衆徒有訴訟事、太以蜂起、初赴任之時、所相從之郎從不
幾、然間事發倉卒、成敗之間、不知所爲、遂電上洛所辭都督也、世以之稱半大貳、

〔今昔物語十五〕播磨國賀古驛教信往生第廿六

嫗答テ云ク、彼ノ死人ハ此レ我ガ年來ノ夫也、名ヲバ沙陀教信ト云フ、一生ノ間彌陀ノ念佛ヲ唱
ヘテ、晝夜寤寐ニ怠事無カリツ、然レバ隣リ里ノ人皆教信ヲ名付テ、阿彌陀丸ト呼ビツ、

〔十訓抄二〕詩歌につけて、異名なごつけらるゝ事有、治部卿能俊は、白川院鳥羽殿の御會に月のな
かなる月をこそ見れどよみて、天變の少將といはれけり、中納言親經卿は、鳥羽殿詩歌合に、月自
家山送我來と作て、山送の辨とぞ付られける、かやうの事、能可心得、同異名なれども、さむるうつ
つの少將、待宵の小侍従なご付られたるは優に覺ゆかし、

〔今物語〕小侍従が子に、法橋實賢と云もの有けり、いかなりける事にか、世の人、是をひきがへるこ
いふ名をつけたりける、法眼をのぞみ申て、

法の橋のしたに年ふるひきがへる今ひとあがりとびあがらばや、と申たりければ、やがてな
されにけり

〔無名秘抄〕九條殿、兼實原いまだ右大臣と申せし時、人々に百首歌よませ給ふことを侍き、その度い